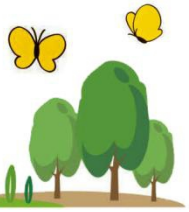
ちょっとそこまで
～お散歩日和（名言編）～



どんな夢でもかなえる魔法／それは続けること
苦しみ悲しみその先見える光／自分の道ずっとずっとContinue　……　高田 尚輝（SEAMO）

もう１４～５年前になると思いますが、水野敬也著「夢をかなえるゾウ」がＴＶドラマ化されたときに、主題歌だった曲が大好きです。SEAMOの「Continue」です。「威風堂々」のメロディが軽快に流れる中、前向きに生きていこうと訴えかけてくる歌詞がとても心に響いてきます。

♪出来ないからやらないんじゃない／出来ないからこそやるんじゃないの？
格好悪くてもやってみようよ／君が思うより君は強いんだよ
負けたら終わりじゃなくて／やめたら終わりなんだよね／
どんな夢でもかなえる魔法／それは続けること
苦しみ悲しみその先見える光／自分の道ずっとずっとContinue♪

どうして心に刺さるものがあるかと考えてみますと、私自身がどうも最近、新しい世界や未知の分野を目の当たりにすると臆病になったり、後回しにしたり、時には逃げ出したり遠ざけたりする傾向が強くなっていることへの警句になっているからではないかと推察します。無意識ながら「もう少し頑張って続けなさいよ。」と自身を叱咤しようとしているに違いありません。

昔から「継続は力なり」という言葉が使われていますし、諺にも「千里の道も一歩より」「雨だれ石を穿つ」「塵も積もれば山となる」があります。最近では、イチロー選手の「夢や目標を達成するには１つしか方法がない。小さなことを積み重ねることだ。」という言葉も有名です。アインシュタインも「天才とは努力する凡才だ。」と言っています。これは、２人とも決して最初から偉業を成し遂げていたわけではなく、継続する努力を惜しまなかった結果、大きな成果を得られたと教えてくれているのでしょう。

ところで、冲方丁の「光圀伝」に、次のフレーズがあります。

「ここまできた。そう思ったときには、頂きは更に遠くに離れた所にある。近付けば近付くほど、頂きは高くなるようだ。峠を登る時、遠目には低くとも、麓に来れば高さが分かる。実際に登り始めれば、頂きは見えないほど高くなる。」

一度でも山に登ったことがあれば、この体験に合点が行くことでしょう。山頂まで目と鼻の先だろうと高をくくって登り始めたけれど、行けども行けども景色は変わりません。辛いこと甚だしい。しかし、これでもかこれでもかと継続することで、いつの日か必ず一気に景色が広がる場所に立つことができるものです。これを幸いだとすれば、どんな幸いも、その陰には必ず辛い何かが隠し味となっているということを示唆していることになります。何とも胸がきゅんとする文章ではありませんか。

当たり前のことですが、私たちの日常は、晴れの日ばかりが続くことはありません。アラビアに「時々蜂蜜、時々玉葱」という諺があります。コミカルな味付けですが、蜂蜜のような甘い日々ばかりではなく、時には玉葱の辛味もあると言っているのです。でも、それこそが人生の轍だと思います。人生楽あれば苦あり。山り谷あり。いや、人間万事塞翁が馬かな。

もちろんそれらも含めて、さらにもう一歩進んで考えたいとも思っています。

それは、前述したように、私たちの日常では全てがうまくいくということはありません。むしろ、失敗したときこそがチャンスだと考え、正面から向き合い、何かを拾って立ち上がれば、失敗の数だけ成長できます。そう考えると、思い通りにいかないことがあったとしても怖れることはないということになります。

ところで、ディズニー・アニメに「インサイドヘッド」という作品があります。ご覧になったでしょうか。このタイトルの意味は「インサイド＝内側」「ヘッド＝頭」ですから、「頭の内側でのできごと」となるのでしょう。主人公の少女ライリーの頭の中にいる「ヨロコビ、カナシミ、イカリ、ムカムカ、ビビリ」という５つの感情がドラマの進行役になって展開する物語です。

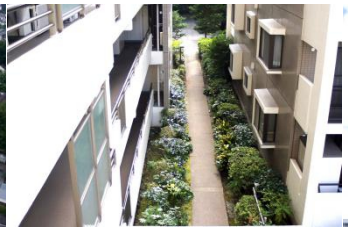
しかし、原題は「Inside Out」となっていることは、あまり知られていません。こちらの意味は、「裏返し、あべこべ、裏表、ひっくり返し」などになるのですが、これで思春期の少女の複雑な感情、コントロールできないもどかしさを言い表そうとしているのだと推察します。

５つの感情のリーダー役であるヨロコビは、とにかくライリーを喜ばせることこそが新たな行動を起こす重要なスイッチだと信じて疑いません。しかし、ただ喜ばせようと試みただけではライリーの心が動かないことに気付きます。動かすためには、それまでマイナス要素だと思っていた怒らせたり、ビビらせたりすることも必要であること。中でも、特に重要なのが悲しむことだと気付かされる、そんな物語です。

思い出をより輝かせるものとは、喜びや悲しみ、怒り、むかつき、ビビりと表裏一体になっているものなんだ。もっとストレートに表現すれば、喜びは悲しみのひっくり返し、表裏一体、感情の裏表なのだと、このタイトルは訴えていることになります。

向暑点描（その２）

写真を撮るとつくづく感じることですが、当団地は全体的な統一感がありながらそれぞれの表情が変化に富み、個性的で、とても美しいと思います。ことに、夏を迎えて太陽の光を真正面に受けて光り輝くさまは、神々しくさえあります。改めて、この地をふるさとと慕う住民たちが、これまでの日々を地道に積み重ねてきた営みと協力の成果なのだろうなと感じます。



ちょっとそこまで
～お散歩日和（地域編）～

６月下旬、ＮＨＫの「ドキュメント７２時間」で、練馬区田柄の吉田農園が放映されました。タイトルは「東京・練馬　野菜の自動販売機」です。

これは私たちにとっては見慣れた光景で、こうして取り立てて番組にするほどでもないと思っていましたが、他地区の人たちにとっては大変珍しいものだったようです。ちょっと意外でした。レタスを目当てにきた親子や日課のランニング帰りに立ち寄る男性などが次々に登場し、編集の上手さも加わって、なかなか面白い内容だったと思います。

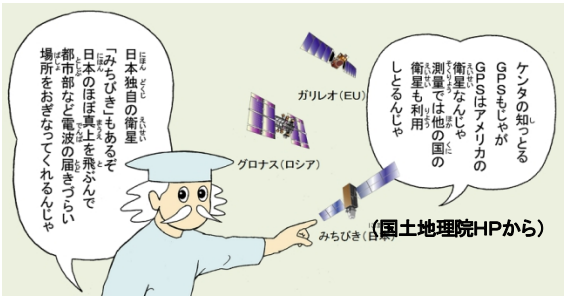
個人的なことですが、私の勤務先では、この農園の協力によって、サツマイモやキャベツ、大根の栽培や収穫作業を２～４年生が生活科や総合的な学習の時間に取り組むことができています。もちろん、地産地消の給食食材を得たり、ソラマメのさや外しやトウモロコシの皮むき体験ができたりと、貴重な体験の場を数多く提供してもらっています。

確かに練馬区は２３区でも緑被率が２６％で最も高く、公園数も６８０か所を越え、緑豊かな区という印象が強いのですが、それ以上に、こうした農地が隣接して数多く残っていることに目を向けるべきだし、もっと誇るべきだと思っています。

「東京の田舎」という表現があるとすれば、それは「住み易さ」を象徴する言葉として受け止めたいと思います。それに、そうした環境が子供たちの情操に良好な影響を及ぼすことは間違いありません。

さて、本題に入ります。

たまたま最近放映されたことから吉田農園から話を始めてしまいましたが、この自動販売機設置場所の目と鼻の先に「練馬区しゃらのき児童遊園」があります。当団地からは、練馬高校の東隣りと言った方が分かりやすいでしょう。地域の子供たちはこの公園を「えんぴつ公園」と称しています。その理由は、ここに電子基準点が建っていて、その形状が見事に鉛筆の姿そのものだからです。



そもそも電子基準点ですが、国土地理院によれば、

「全国約 1,300 ヶ所に設置された GNSS 連続観測点です。外観は高さ５ｍのステンレス製ピラーで、上部に GNSS 衛星からの電波を受信するアンテナ、内部には受信機と通信用機器等が格納されています。 基礎部には、電子基準点付属標と呼ばれる金属標が埋設あり、トータルステーション等を用いる測量にも利用できるようになっています。」

となっています。トータルステーションとは、土木・建設工事を進める時に使用する、角度と距離を測定する測量機器のことです。

全国約 1,300 ヶ所という数値からアメダスを連想された方も多いでしょうが、三角点についても練馬区に設置されていることは知っていても良い情報だと思います。

ちなみに、近いうちにこのコラムでも触れたいと思いますが、練馬のアメダスは、現在、石神井公園三宝寺池の北に隣接する「練馬区立松の風文化公園」の西端にあります。散歩がてら探してみてください。

在りし日のナツツバキ

話を戻します。この「しゃらのき児童遊園」の正面には今春まで立派なナツツバキの巨木が立っていました。これほど見事なナツツバキをこれまで見たことがありません。しかし、残念ながら立ち枯れて若木に植え替えられていました。無念です。「しゃらのき」とはナツツバキのことです。「祇園精舎の鐘の声」で謡われる「沙羅双樹の木」のことです。

当団地では、５号棟の東側の緑地中央に植栽されています。この木も当初は弱々しくて、ちゃんと根付き育つのかと心配するほどでした。しかし、今では随分逞しく育っているとともに、花の数も見違えるほどに増えました。

なお、「しゃらのき児童遊園」の写真上、赤い矢印で示しているのが電子基準点です。ついでに触れると、地図記号は右の通りです。三角点から電波が発信されている図です。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

３本の樹木について触れたいと思います。

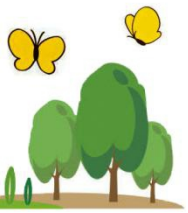
１本目は１０号棟前のトチノキです。昨年までは何も問題なかったのに、今春、わずかに芽を出したところで突然立ち枯れてしまいました。原因不明ですが、理事会で代わりのトチノキを植栽しようと動いています。２本目は銀杏通りからの入り口に立つサワラです。まるで当団地の仁王門のように２本並んで立っています。次号で詳しく触れたいと思っています。３本目は７号棟集会室前のエゴノキです。団地創建時から植栽されているものですが、当然ながら幹が随分太くなっているなと感じました。相変わらず虫こぶが多くできていますので、興味のある方はホームページ「花便り」を閲覧なさってみてください。

トチノキ

サワラ

エゴノキ

ちょっとそこまで
～お散歩日和（植物編）～



春つばき 夏はえのきに 秋ひさぎ 冬はひらぎに 同じくはきり

これは、漢字の覚え方として言い伝えられているもので、それぞれ「椿（つばき）・榎（えのき）・楸（ひさぎ）・柊（ひいらぎ）・桐（きり）」を表しています。この中で、「楸」だけはよく分かりませんでしたが、調べてみると、樹木名としては「アカメガシワ」だろうとのことでした。

さて、ここで取り上げたいのは季節柄、「木へんに夏」ということで「榎」ということになります。

当団地に関しては、敷地内ではないのですが、隣接する夏の雲小学校職員通用口脇・第一団地集会室前・第三団地地下駐車場出入り口正面にあります。夏の雲小学校については、３本並んでいるようですが、樹高が高くてはっきりと判別できませんでした。

第三団地地下駐車場出入口前

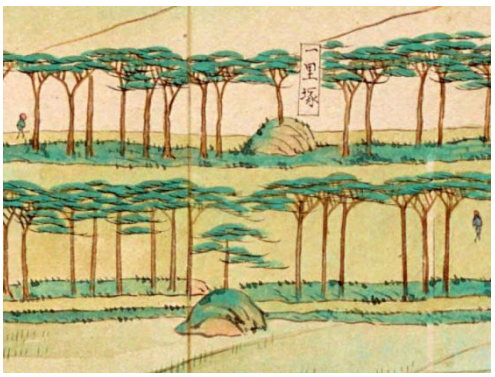
第一団地集会室前

練馬区立夏の雲小学校前

エノキの名前の由来については、Wikipedia によれば、
・縁起の良い木を意味する「嘉樹（ヨノキ）」が転じてエノキとなった。
・秋にできる朱色の実は野鳥などが好んで食べることから、「餌の木」からエノキとなった。
・枝が多いことから枝の木（エノキ）と呼ばれるようになった。
などの説が紹介されていました。

なぜエノキを「榎」と書くのかについては、江戸時代に整備された一里塚をもとに説明すると分かりやすいように思います。

一里塚とは、旅行者の目印として大きな街道沿いに１里（約3.927㎞）毎に設置した塚（土盛り）のことです。一里塚の大きさは５間（約９ｍ）四方、高さ１丈（約１．７ｍ）に土を盛り上げて造られ、一里塚の上には主に榎が植えられました。これは、木陰で旅人が休息を取れるように配慮されたことと、植えられた樹木が築いた塚の崩壊を根で防ぐことに拠ります。



日光道中絵図より

その旅人にとって、特に夏の日射しの下での旅路はきつかったことでしょう。そんな時に木陰の心地良さをもたらす「榎」はさぞインパクトがあったはずです。まさに「椿」が春を告げる時期に花を咲かせることから生まれたように、まさに秋になると紅葉が美しい「楸」のように、まさに花の少ない初冬の白い花を咲かせる「柊」のように、それぞれの季節に印象深い樹木としての地位が与えられたのです。

練馬に散在する屋敷森を見ていますと、同じニレ科のケヤキとエノキが混在していています。その上、いずれも大木になり遠方からでもよく目立つし、何よりも姿がよく似ています。

最も簡単な識別法は葉脈の違いを見ます。エノキは三行脈と言い、葉柄からいきなり３つに分岐していて、

しかも左右不対象となっています。それに対してケヤキは並行脈で、葉縁にまで達しています。

エノキ

ケヤキ

また、冬木立ちの姿からも判別できます。ケヤキは、樹冠が扇を開いたような形になります。これは、枝の分岐が少なく小枝が長くなる性質によります。一方、エノキは、丸くこんもりした樹冠になります。すぐ枝分かれするため枝が短く、分岐の角度も６０度くらいで直角に近いので枝が混むのが原因です。

ケヤキ

エノキ

最初は区別しづらいですが、意識して見るように心がけると、次第にその違いが分かってきます。譬えるならば、若いアイドルの顔が識別できないとか、最近の車を見分けられないとかと同じです。年齢のせいではありません。意識と関心の差です。

東京都内ですぐに思い浮かぶ榎絡みの名所と言えば、板橋の「縁切り榎」、王子の「狐火と装束榎」、そして、神宮外苑の「御観兵榎」でしょう。これを機に訪ねてみるのもよろしいのではないでしょうか。

王子の狐火と装束榎

編集後記

雑草とは何かという問いに対して、アメリカ雑草学会は「人類の活動と幸福・繁栄に対して、これに逆らったり妨害したりする全ての植物」と定義しています。その卓越したユーモアに脱帽です。

夏は植物の生長が促され、それに伴って必ず面倒な思いをするのが上記の雑草です。「たたかう植物」（稲垣栄洋著）を読んでいますと、次のような文章に出会います。

「少しばかり騙して短期的に得をするより正直に助け合った方がお互い有利ということなのである。」

「他の生物と共存関係を築くために植物がしたこと、それは、自分の利益より相手の利益を優先し、『まず与える』ことだったのである。『与えよ、さらば与えられん。』植物は、この言葉を説いたイエスが地上に現れるはるか以前にこの境地に達していたのである。」

心情的に野に咲く雑草のことが嫌いではないので、こういう文章に出会うと嬉しい気分になります。

また、こんな解説も出てきます。

「地面の下は『シードバンク』（種子の銀行）になっていて、膨大な数の種子が発芽のチャンスを待っている。雑草の多くは光で芽を出す。だから草取りで土がひっくり返ると、却って雑草を増やす結果にもなる。」

早い話が特定の植物を育てようとせっせと世話すればするほど、新たな雑草が芽生えてくるということです。それもまた愉快なことだと思うのです。

ほぼ１０数年おきに巡ってくる理事の仕事は、土中で長く眠っていた種子に似ているような気がします。失礼ながら、銀杏通信など見向きもしなかった日々が嘘のように、連日、紙面づくりに明け暮れています。

改めて、私たちはお互いに「助け合って」生きているんだと確認している次第です。　（タコヤキマン）